



Title	編輯を終りて
Author(s)	酒井, 全太郎
Citation	懐徳. 1929, 7, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88804
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

るにふさはしい晴れわたりたる日本晴の空には、一
きれの雲だにない、産業の都大大阪に行幸を思ひ立
たせ給ふ 大御心だに有難きに、大阪 御上陸の第
一日、侍従を我が懷德堂に差遣し給ふことは、まこ
とにかしこききはみである、大阪町人學問所たる傳
統こゝに二百有餘年、いま尙市民の精神教育に不斷
の盡力を續けてゐる懷德堂の事績を視察せしめ賜ひ
て、今後の努力を激勵し賜ふ 大御心と恐察し奉り
て感涙に咽ぶ次第である、御差遣の甘露寺侍従を乗
せし自動車は、午後二時四十三分着、南小講堂の休
憩所にて、教授の説明を御聽取あり、種々御尋ねあり
て後、理事長の先導にて大講堂に入り、講壇など限な
く巡覽せられ、講堂北側に陳列の草茅危言など手に
せられ、聽講生の名札にさへ一々目を留められ、た
めに豫定の時間を少し後らせられ三時十五分御歸り
になつた、懷德堂の現状も定めし天聽に達せしこと
ゝ恐察し奉る、午後六時よりいさゝか今日の光榮を
記念するため、小宴を催す、財津吉田兩先生を初め、

參會者二十二名、盛會であつた、

六月九日 會員野口幸雄君母堂の葬儀あり、會員十
數名會葬、

六月十日 會報臨時號謄寫發送、

六月十九日 會誌寄稿の催促、茶話會延期の通知發
送、

六月二十六日 會報六月號謄寫發送、

七月八日 會員飯島君夫人の逝去を聞き、酒井山本
兩幹事弔問、

八月五日、財津先生藤塚君幹事三名會合、會誌編輯
に就て協議、

編輯を終りて

酒井全太郎

財津吉田兩先生を初め會員諸君の寄稿も集り、會員
中川君の厚意による武内先生の論説をも加へ、美事
なものが出來たでないかと自慢いたしたいのである
が、何を申すも忙しい職業の片手間にやることで、及
ばぬところも多からうが、お許しを願ひたい。大阪

は日本の臺所だ、いや東洋經濟の中樞だと大層な鼻息であるが、なんだかあはたゞしい落付かぬところでもある。損徳の算盤玉も大事であるが、人間の魂の修養も棄て置けぬは、理屈ぬきの理屈である。坊さんのお念佛も有難い、牧師さんのお説教も結構であるが、懷徳堂の門をくゞつて、聖經賢傳の講義を聽く味は、また格別である。浩然の氣は自ら養はれ大丈夫の魂は自ら磨かれる。新知識を獲て見聞を廣めることも出来るなど、手前味噌はならべずとも、會員諸君は千萬御承知のことであらうが、世間に所謂御宣傳が願ひたひものだ。西村永田松山三先生の時代を種まき培ふ創建の時代だとすれば、小倉財津吉田三先生の時代は、花を咲かせ實を結ばすべき次の時代だといへる。あだかもよし、此の時代の劈頭に辱くも侍従の御差遣を拜し奉る。此の懷徳堂を護りたてゝ、意義あらしめ光輝あらしめることは、我々の義務でもあり誇りでもあり、聖恩の萬分の一に報い奉る所以でもある。この上とも會員諸君の御援助を希望する。

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月十二日發行

【非賣品】

大阪市港區八幡屋中通三丁目九七

發行兼編輯人 小 沼 量 平

大阪市東區島町二丁目一〇

印刷人 植 田 政 藏

大阪市東區島町二丁目一〇

印刷所 植 田 印 刷 所

大阪市東區豐後町懷徳堂記念會内

發行所 懷徳堂友會

電話東三五五番